



# 森と海からの手紙

★17便★

猛暑と台風と線状降水帯に明け暮れた、この夏の初め。信州・信濃町の山麓にある「アファンの森」で、

長年「虫の世界」を探访してきた解剖学者の養老孟司さん(85)と、7組19人の親子が、虫捕りに興じた。

子供の体験学習に取り組み都内の企業が主催。養老さんを「僕のセンセイ」と慕っていたC・W・ニコルさん(享年79)が、仲間たちとともに「生き物たちが

# 果てしない「虫の世界」



ニコルさんの遺灰が納められた石碑に座って歓談する養老孟司さん(右)＝いずれも長野県信濃町のアファンの森で

## 物差しを捨て 自然の中へ

共生できる空間を」と手掛けてきた森が会場だ。

鎌倉の自宅からの長旅に疲れがにじむ養老さんの面持ちは、「虫の世界」に踏み入れた瞬間に転じた。鎌倉の海や山河で遊んだ、少年時代の顔付きに思えた。視線は、チョウが舞うように森を漂いながら、虫たちの姿を追い続けた。1枚ずつ葉っぱを裏返し、弧を描くように捕虫網を振る。時には棒で木の葉をたいて虫を落とし、樹皮の割れ目や穴を見つけたときのぞき込んでみる。

森の入り口で出迎えてくれたのは、ゴージャスな白毛のドレスをまとったような姿から「白髪太郎」の愛称で呼ばれているガ、クササンの幼虫だ。「触っても大丈夫です。毒はありません」。とつとつとした養老さんの言葉に促され、子供たちが恐る恐る指を伸ばし、ほごなく「サワサワ」

虫捕りの行動圏は、「10分四方で、十分」という。「森には、生き物たちの世界が果てしなく広がっている」とも。片やアファンの森は、東京ドーム8・1個分の面積。「広過ぎです。僕の人生の残り時間では、到底、回り切れません」。サラリと言った。

そんな養老さんが虫捕りに没頭していく姿を横目に、最初は及び腰だった子供たちも、いつしか捕虫網を手に「虫の世界」に迷い込む。「こんなのいた!」「これは何虫?」。森の中で子供たちが動き出し、それに感化されたように、親たちも虫探しを始める。脱皮したてのエゾセミと抜け殻を見つけたのは、小学生の男子。「飛び立つ前に、ぬれた羽を乾かしているところだよ」。アファンの森のスタッフの説明を、目を輝かせて聞いていた。

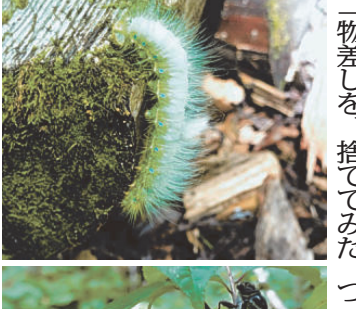
語らひは時に、質問の場が変わった。地球環境や教育からゲノム操作や生成AI(人工知能)に至るまで。親たちは「先生の考えを聞かせてください」と、問いを重ねた。誰も、不安や疑問を抱えていた。その一つ一つに応じながら、養老さんは、極めて狭い、重層的に連なる、森の生き物たちの世界。「地下に広がっている」という。「僕が子供と親を森に連れ出すのは、五感を開放して、それを全身で感じてほしいからです」

「物差しを嫌う土壌は「7歳で迎えた玉音放送を境に生まれた」という。昨日まで使っていた教科書を、僕らが、墨で塗り潰していくんですよ。あれがベースになったようです」「だから締め付けるものは、大概、嫌いです。ネクタイや靴下も、物差しと同じように、嫌い」。ネクタイと靴下が嫌いな私も、思わずうなずいていた。

物差しを嫌う土壌は「7歳で迎えた玉音放送を境に生まれた」という。昨日まで使っていた教科書を、僕らが、墨で塗り潰していくんですよ。あれがベースになったようです」「だから締め付けるものは、大概、嫌いです。ネクタイや靴下も、物差しと同じように、嫌い」。ネクタイと靴下が嫌いな私も、思わずうなずいていた。

養老さんは、著書「神は詳細に宿る」の中で、こんな思いをつづっている。△詳細を調べると、いろんなことが分かる。そうすると、何が起るか。世界が膨張する。ビッグバン以来、宇宙は膨張し続けているという。詳細を見ることが、それと同じ。(略)現代人の世界はその意味では、極めて狭い、重層的に連なる、森の生き物たちの世界。「地下に広がっている」という。「僕が子供と親を森に連れ出すのは、五感を開放して、それを全身で感じてほしいからです」

2023年夏、養老さんの言葉を記す。『委員編集委員・萩尾信也』



「白髪太郎」の名で呼ばれるクササンの幼虫(右上)と抜け殻(左下)

長野・アファンの森 夏の初め



随時掲載